

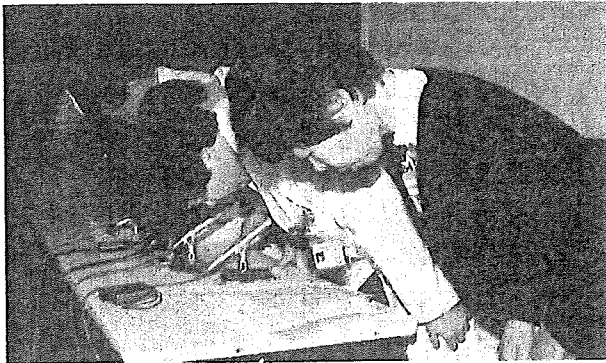
見逃し53時間も……

京大病院死亡事故

加湿器に10回以上補充

エタノール関係者「信じられない」

初歩的な医療ミスで、患者の命がまた奪われた。京大病院（京都市左京区）で七日、明らかになった十七歳の少女の死亡事故。国内最高の医療水準を誇る病院で、五十三時間にわたって十回以上エタノールを補充したことだれも気付かなかった事態。専門家も驚かす隠された。今日三日には、東京都立広尾病院で起きた点滴薬の取り換え「事故」で、当時の病院長が書類送検されたばかり。教訓はなぜ生かされないのか。（本文記事一面）



患者が死亡した医療ミスの会見で頭を下げる京大病院の医師や看護部長（7日午後6時、京大病院で）

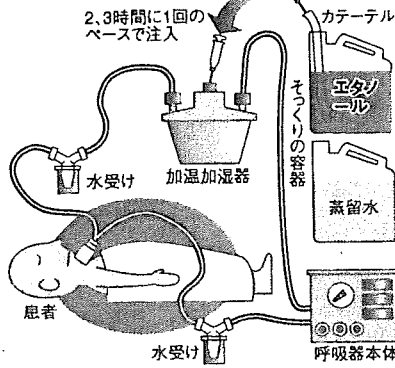
【会見】主治医も分からなかった。七日後五時過ぎ、京大病院で始まった会見で、「なぜ、まだ三日以上も分からなかったのか」と質問が飛ぶと、病院側はそう話した。そして、「タシクを間違えた看護婦も、その後気付かずエタノール

を補充し続けたほかの看護婦も大きなショックを受け、反省している」と、衝撃の大きさを認めた。

【勘違い】加湿器は、体温程度に温めた霧状の水を空気に混ぜる装置で、蒸留水以外の液体を入れることはな

医療現場では、薬剤や薬品、指示の取り換えは常に起きる。薬剤の形や色を交えるなど、さまざまなミス防止の工夫も始まっているが、結局は、医師や看護婦らの心づかいにかかると、このため、誤用が絶えず、同じ形状の容器を使っていた水虫の治療薬やカプセルなども形や色を交えている。片仮名をある。

京大事故の原因



加湿加湿器 人工呼吸器の気道粘膜も傷つける。患者の気管へ直接送り込まれるため、口や鼻、のどで加湿できない。そのままだと、たんの分泌物を固くするだけでなく、

輸血でも、透明の血液バッグは、採血の方法によって形状、容量とも多少異なるもの、基本的に長方形の袋状。血液型とラベルの色を交え、「現場の注意を促している」（日本赤十字社）が、血液型を間違える過誤輸血は今も少なくない。国内では年間十数例は発生しているとみられるが、実感はさっぱりしない

ため、日本輸血学会が現在、全国調査を実施している。

【疑問】 今回のケースでは、タンクの形状は似ていたが、医薬品の「形状研究会代表の別府宏樹医師は「信じられない」と繰り返す。「揮発性があるエタノールは、別に保管するのが当たり前のはず。広尾病院のケースでも同様に信じられないことが起きた。高度医療機関であろうと間違いが起き得るというところを、医療関係者が肝に銘じなければならぬ。患者さんがあまりに気の毒」と深刻な声で話した。

人工呼吸中の事故に詳しい島田康弘（名古屋大医学部教授（麻酔学）は「加湿器に細菌が混入するケースはあるが、蒸留水以外の異物を入れた事故は聞いたことがない。高湿度

か」と疑問を投げかける。

【背景】 医療事故による全国の被害者組織「医療過誤原告の会」の会長を務める長野市の奥子製薬業、近藤邦男さん（64）は、医療事故続々（こたけ）という「二番大きな原因は、医療の質に対するチェック機能がつかない」と、たゞをまかせになるものもあるが、ほかに「随分と早くから、随分と埋もれてしまっている。カルテ開示なども、医療現場での情報公開が進んでおらず、事故が起るとも検閲できず、同じことの繰り返しになる」と指摘する。

京大病院人工呼吸器エタノール事件
府警捜査／病院会見
2000年3月8日 読売新聞